

専門的職業人、独立した作家を育成すると言う目的は、高次元に達成されていると言える。この高次元の達成の裏付けとなるのは、学部・学科等が高い専門性を有し、それに対応した組織・課程・施設・支援等を展開しているからである。

一方で、この展開は縦割り組織となる弊害を生む必然性を有し、本学についても該当しない訳ではない。これについては、全学における共通の利益の観点から諸制度を構築することが求められていると考えられる。諸制度の再構築については、本点検・評価活動を通じて、諸改善・改革が進められたと考えている。

この諸改善・改革については、既に十全に対応出来たものが多いが、一步を踏み出したばかりで更なる改善・改革を重ねる必要があるものもある。更なる改善・改革を重ねる必要があるものについては、一つずつ着実に改善・改革を進めて参りたい。

個別課題について、喫緊の課題として認識しているのは、ファカルティ・ディベロップメント（以下「FD活動」）の推進である。FD活動については、教員の資格審査、業績評価（研究、教育、学内業務等の総合的な評価）、諸研修、教授法の開発など個別の取り組みだけではない。これらのインセンティブとなる仕組みを手当するなど、総合的な見地での組織的対応が必要であると考えている。これについては、「FD活動」という手段が目的化しないように、FD活動の基本的な考え方を構築し、その実施に相応しい組織を検討することから始めたい。

次に、より高次に効果を高めるための課題については、学生の支援についてである。学生数の増加に伴い、制度面での支援に力を注ぎ一定の成果を得て来た。しかしながら、一般大学と異なり、作品制作上の悩みや多様な進路など、学生ひとり一人の支援のあり方は各者各様であり、一層の個別対応が望まれるところである。

また、十分な検討を要する課題については、上野毛キャンパスの老朽化に伴う対応である。キャンパスと言うハード面での整備だけでなく、造形表現学部の教育内容等、「教育のあり方」を全学的な見地で十分に検討を重ねる必要があると考えている。

この他、大学の社会貢献については、従来より積極的に行って来ているが、「本学における社会貢献のあり方」を整理し直す必要を認識している。